

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<随想>詩歌と映像

著者	成清 良孝
雑誌名	日本文学誌要
巻	65
ページ	136-137
発行年	2002-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020211

詩歌と映像

成 清 良 孝

大河原忠蔵氏の『状況認識の文学教育』（昭和四十三年、有精堂出版）を読み返そうと思つて、書棚を捜し始めたが、なかなか見つからず、一週間かかつて、やっと捜しあてた。もちろん日がな一日捜していたわけではない。見当をつけて、十分かそこら引つ掻き回して出てこない、他日を期していた。

大河原さんは当時、明治学院高校教諭だったが、後に国立奈良教育大学教授になった。わたしと同時代の高校の国語教員で、大河原さんや『状況認識の文学教育』を知らない人がいたら、それはもぐりだ。

『状況認識の文学教育』のポイントを、誤解を恐れずに紹介するなら、子どもたちに文芸作品をより深く、より正確に理解させ鑑賞させるためには、作品成立の背景や状況を資料として用意すること、そのためには関連する映像なども積極的に使うべきである、ということであろう。

当時のわたしは、大河原さんの考えに絶対反対で、ある教科書会社のPR誌の座談会で彼と同席した時も、座談会の主題を

逸脱して、状況認識の文学教育をはげしく攻撃したことがある。

文芸作品は言語を媒体として形象化されたものだから、映像やその作品が生まれた地形や俯瞰図などをつつ支い棒にして読みすすめるのは邪道ではないか、と思つていた。

映像ではなくても、その作家の日記や書簡や他の作品を突き合わせて、「日記にはこうあるから……」とか、「書簡や他の作品をつぶさに見れば、こういうヒントが隠されている……」などと勘案するのは、資料にふり回される一種の偏執狂で、おのれの行為にすっかり自己陶醉に陥つて、ものの本質を見る目が霞んでいゝ。作品はそれだけで理解され鑑賞されることを前提にして成立しているはずではないのか。

わたしは加入していた日本近代文学会の傾向が、シェークスピアの研究に、彼の洗濯屋の領収書まで捜し出そうとするような愚にもつかぬ瑣末主義に憤懣やるかたなかった。

昭和四十六年、内地留学していた大学の試験休みを利用して、初秋の京都に遊び、たまたま立命館大学で開かれていた日本近代文学会に出た。広島あたりの女子大の助教授が研究発表？で

「藤村の『初恋』（若菜集）のモデルがわかりました」

と、ひどく興奮してしゃべっているのを聞き、バカバカしくなつて日本近代文学会を足蹴にする思いで辞めた。まるで芸能週刊誌のゴシップ記事と同じではないか。

第一作品にないものを、あれこれ詮索することに狂奔していたら、肝腎の作品から受けた感動が蒸発してしまう。

萩原朔太郎が、詩歌の解釈で大切なことは、正しいとか、正

しくないとかよりも、詩情へのシンパシー（エンパシー？）が深いかが大切、と言ったことが、若い頃からずっとわたしの念頭にあった。

しかし、時代は変わった。さまざまな映像の驚異的な発達により、言語メディアの置かれた状況も大きく様変わりした。

たとえば村野四郎の「さんたんたる鮫鰈」でも加藤楸邨の「鮫鰈の骨まで凍ててぶちきらる」でもいい。これらの詩歌を鑑賞する場合、「鮫鰈の吊し切り」を見たことのない者には、イメージのふくらましようがない。スーパー・マーケットや魚屋では、鮫鰈鍋の切り身や鮫肝は見かけても、吊し切りはまず見ることはできない。

この鮫鰈の詩や俳句を、子どもたちの感性にどう訴え、理解させるか、ひと頃ひどく悩んだことがある。でも、都合のいいことに、教科書会社のサービスで、鮫鰈の吊し切りを10コマのスライドにした補助教材があった。

そのスライドは、なかなかの迫力で、楸邨の句はもちろん、村野四郎が詩の初めにリルケの詩の一節を引用した主題の暗示にも十分対応できるものだった。

また、佐佐木信綱の、

ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

は、一九〇八年（明治四十一）の晩秋に作者が薬師寺を訪れた時の歌である。主宰する竹柏会の機関誌「心の花」に発表された。

歌の意味は平明だが、うつりいく秋の旅情が、助詞「の」を六回も重ねながら、結句の「一ひらの雲」に見事に集約されて

いく。

わたしはかつて池の岸边に群生する葦を近景に、薬師寺の東塔を遠望したカラー写真を見たことがある。信綱の詩情とぴったりの重なる画面を眺めながら、歌の味わいをいっそう深めたのであった。

一九八一年（昭和五十六）に西塔が再建されて、対の眺めになったが、これは信綱の歌の情感を損ねる構図になってしまった。

詩や短歌よりも、いっそう独善的傾向が強い俳句のようなジャンルには、映像の役割は相対的に大きい。（朝日歌壇では複数の選者が同じ短歌を採ることはしばしばなのに、俳壇では、そういうことはまさに稀有のこと）

加えて歳時記にはあっても、現代の日常には死語に等しい季語を得意満面に使いたがる心の貧しい宗匠が多い。

それなら、おのれの作品に、もっと映像を活用したらどうか。その方が傲慢で薄汚い自句自解などより、よほどすっきりしている。

ともかく現代では映像が主役で、詩歌は完全な脇役。特に俳句は映像におけるスパイスのようなものと諦めたがよい。四百万画素の高感度のデジタル・カメラでも購入して、自作の俳句は映像の添えものとして、控え目に書き記すようにしたら、どうだろうか。

（なりきよ よしたか・一九五六年卒）